

MA-05
BIGRO

ビグロ

ジオン公国軍が一年戦争に投入したMAのうち、最初期に実現された機体。既存の宇宙ボッドを強化・発展させたもので、MSのような汎用性に欠けるものの2基の熱核ロケット・エンジンが生み出す大推力を活かした一撃離脱戦法は他の追随を許さず、少数ながらも量産され、実戦投入されたとの経緯がある。一年戦争最終局面のア・バオア・クー攻防戦でも本機小隊が配備されている。



全高	23.6m
全長	45.5m
全幅	125.51
機中重	229.8t
装甲材質	超硬スチール合金
エンジン出力	17,800kW
主武装	136,100kg
センサー有効半径	111,100m
武装	メガ粒子砲×1 4連装ミサイルランチャー×2 大型クローアーム×2
機体	トクワン 他

SUNDAM
MS Bible 23
FROM THE HISTORY OF THE

CONTENTS

■ 戦場レポート 軌道上での激戦	01	■ MS戦記 ビグロと系列機 戦況の記録	18
■ MS機体解析 機体解説 武装解説 ザクレロ、ヴァル・ヴァロ、グラブロ	05 07 08	■ MS進化論 ビグロ 開発系諸図	20
■ 関連MSラインナップ ビグロと関連機体	14	■ メカニック・ジャーナル メガ粒子砲 一年戦争期の世界(宇宙)	24 30
■ MSパイロット トクワンと周辺人物	16	■ ガンブラ ジェネレーション 宇宙での戦闘に特化した機体を再現!	34







『機動戦士ガンダム』第31話「ザンジバル、追撃!」より

軌道上での激戦

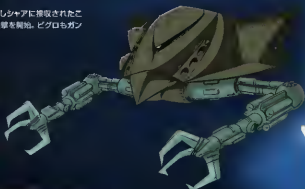


運用MS ジオン公国軍

本来はビッグロの運用試験のために編成された部隊。しかしシャアに接収されたことで本来の任務は一時中断となり、ホワイトベースの追撃を開始。ビッグロもガンダムとの交戦に投入されることになった。



MS-09R
RICK-DOM
リック・ドム



VS

MA-05 BIGURO
ビッグロ

圧倒的な機動性を誇るMA。そのためパイロットにも高いG能力が求められ、通常の人間では機体能力を十分に発揮させられない。

ザンジバル 艦橋乗降装置



これ以上

地球連邦軍基地ジャブローでの修理と補給を終えたホワイトベースが、再び、宇宙へ上がることになった。情報を察知したシャア・アズナブルは行動を開始。MA試験部隊が保有するザンジバル級機動巡洋艦を接收し、ホワイトベースの追撃にかかったのである。月に向かうかのようなホワイトベースの軌道を見たシャアは相手が困っており、連邦軍本隊は別行動を取るだろうことに気付いた。それでもシャアは追撃の手を緩めることなく、トクワンに出撃を指示。MAビグロとリック・ドム2機で構成された攻撃部隊がホワイトベースを急襲したのだった。

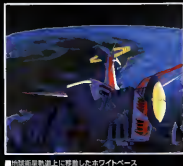
戦闘地域

ビグロからの襲撃を受けた時、ホワイトベースは地球衛星軌道上を航行していた。連邦宇宙連地ルナツーとは異なる方向へ向かう軌道は特別な意図があるかにみえるが、実はこの軌道はフェイクだった。ジャブローで建造された連邦艦艇隊(ディアンム艦隊)はルナツー宙域に集結し、ジオン公団軍宇宙要塞ソロモンを襲撃する手はずになっていた。そのためホワイトベースには本隊の進路を知らせないために臨任務が課せられ、単独で衛星軌道を航行していたのだ。

ビグロがガンダムと交戦する一方、ザンジバルはホワイトベースに急接近。すれ違いざまの襲撃を仕掛けた。



ホワイトベースからの一撃が機体側付近を貫通したことでザンジバルは爆没。しかしシャアは追撃を続けた。



■地球衛星軌道上に移動したホワイトベース



RX-78-2 GUNDAM
ガンダム

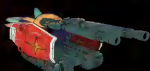
で多くのMSを相手にしてきたが、安定したビグロの機動性に苦手を覚えてしまう。



RX-77
GUNCANNON
ガンキャノン



RX-75
GUNTANK
ガンタンク



G-BULL EASY
Gブル・イージー

運用MS 地球連邦軍／ホワイトベース隊

サイド7からジャブローまでの航海を成し遂げ、名のある公団軍部隊との戦闘に勝ち抜いたことから「ニュータイプ部隊」と目されるようになった。それだけに敵味方の注目の的になり、一部の連邦艦艇高官から厄介者扱いされている。



WHITE BASE
ホワイトベース



G-SKY
Gスカイ

HISTORY TIMELINE — 物語の展開 —

■高機動戦闘の果てに

MS以上のサイズを誇るビグロは強力な推進機関を搭載しており、ガンダムに一撃離脱戦法で挑んだ。すると態度目かの攻撃でガンダムが機体によって引かれるというアクシデントが発生。急激なGの変化にガンダムのパイロット(アムロ・レイ)は気を失い、トクワンはとどめを刺そうとする。

アムロが気を失っている間を突いてガンダムをクローで押さえたビグロは、機体メカが子音による近距離からの攻撃を仕掛けた。



その後、トクワンを奪うデミドリーが試作MAザクレロで敵対者に挑むが、ガンダムMAモードによって張り付きにしている。

だがビグロが放たれる前刻、襲撃を察知したアムロが反撃に転じ、直撃を受けたビグロはトクワンを乗せたまま爆発して果てた。



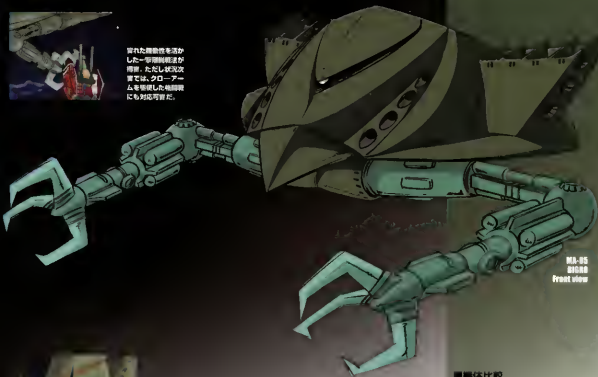
MS 機体解析



MA-05 BIGRO
ビグロ



優れた機動性を活かした一歩突進戦法が得意。ただし状況によっては、クローアームを駆使した砲撃戦にも対応可能だ。



MA-05
BIGRO
Front view



「ア・バオア・クー」の「シニアヘース」で生産された1機が実験テストのために宇宙へと送られたと言われている。



標準スケール
パイロットとの対比。

■機体比較

RX-78-2
GUNDAM
18.0m

MA-05
BIGRO
23.8m



宇宙空間における高機動戦闘能力を追求し、 最先端装備された唯一のジオン公国軍MA

MA-05 ビグロは一年戦争期に唯一実戦配備されたジオン公国軍のモビルアーマー（MA）である。その原型となったのは、U.C.0071に始まった次期主力兵器開発でMIP社が提示したMIP-X1で、選考ではのちにMSへと発展するZEONIC社のZi-XA3に敗れている。だが、従来の軌道戦闘機を凌駕する加速性能が高く評価され、新たな機動兵器の雛形となった。そうした経緯で誕生した機体がビグロで

あり、宇宙空間における高速戦闘に特化した性能を特徴としている。カリフォルニア・ベースで開発された本機は、最初期のMAでありながら良好なバランスを有し、初期量産型として12機ないしは14機が生産されたと言われている。また、出力系などに改良を加えた後期型も存在したとされ、一年戦争末期のア・バオア・クー攻防戦には3個小隊ほどの戦力が投入されたとする記録が残っている。

23.8mという数値は全高で、全長は45.5mにも及ぶ。MSを上回る実体サイズは、軍用兵器を凌駕するための大型化を望まないMAの設計思想を如実に物語っていたと言える。一方で、その巨体に負合う性能を有していた。



ア・バオア・クー攻防戦の最前線、宇宙戦艦に投入されたビグロの機体。戦場中の地球連邦軍艦隊を攻撃したと言われる。

MS 機体解析 機体解説

AMBACシステムの導入を最大の特徴とする 新機軸の機動兵器としてのビグロの設計

ビグロの設計は、優れた加速性能に反して運動性に劣るMIP-X1の欠点をAMBACシステムで補うという発想を出発点としている。MSの開発過程で考案されたAMBACシステムは一对の動作肢でも1分な効果を得られることから、非人型の機動兵器であるMAにも導入されたのである。本機は切り詰めたような全長の短い機体形状を採用し、一对のマニピュレーターによるAMBACと各部の推進器を併用することで、180度姿勢変換を1.3秒で行うほどの高い運動性を発揮。空間戦闘においてMSを大幅に上回ったのである。

■モノアイ

ビグロの走査端末には、既存のジオン公国軍MSで性能が実証されたモノアイが採用されている。本機が公国軍の機動兵器である以上、独自の先端技術にあるセンサシステムが導入されたのは当然である。モノアイの採用によって、本機はミノフスキー粒子散布下での高機動戦闘に対応した視認・集束能力を獲得していた。



モノアイレールは機体上部を左右に走るかたちで設けられ、前方約180度をカバーする構造となっている。

モノアイ

側部 サブ・スラスタ

左側がモノアイと側部サブ・スラスタ、下がメイン・スラスタと下側サブ・スラスタの位置を示している。

メイン・スラスタ

下部サブ・スラスタ

■スラスタ

生推進機関として機体後部に2基の熱核ロケットエンジンを用意。その下部に2基と機体左右に3基ずつのサブ・スラスタを装備している。各スラスタを合わせた総推力は13万kgを越え、MS-06FザクIIの3倍以上にも達する。その加速力は通常のMSの比ではなく、AMBACを組み合わせた本機の高速戦闘能力は量産に足ると評価された。



2基のメイン・スラスタの推力は非常に高く、その自体重機に克服させる推進力を確保した。

■コクピット

ビグロのコクピット・レイアウトは定かではないが、内部構造は第二期生産型以前の公国軍MSと同じ仕様となっていた。本機の生産はU.C.0079.04に始まっていたとされ、2月に着手された統合整備計画の恩恵を受けていなかったのだろう。ただし、圧倒的な加速性能が生じさせるGに対応するため、コクピットには耐G性能が与えられていたと推測される。



ビグロのコクピット内蔵の様子。座席と操縦桿の配置は初期のMSのものが流用されたと見られる。



重力の影響を受けやすい地球近傍の宙域でも自由な機動が可能になるほどの圧倒的な能力を有する。



高機動機中のGは強烈で、本機と交戦したアムロ・レイは戦艦が破綻した際に失神している。

優れた運動性を活かしてガンダムを捕縛するビグロ。これまで多くの公国軍MSを駆使したガンダムだが、宇宙空間での高機動戦闘に特化したビグロには苦戦を強いられる。

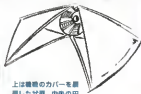


MSを凌駕するビーム兵器の攻撃力とそれを生かした一撃離脱主体の戦闘スタイル

MAの開発においては、MS以上の攻撃力を付与するためにビーム兵器の装備が模索された。人型の制約を取り除くことで、ビーム兵器を稼働させる大型ジェネレーターの搭載が(ある程度は)容易となった点も、そのコンセプトを後押ししていたと考えられる。結果、ビッグロには大型のメガ粒子砲が装備され、機動性を生かした一撃離脱戦法や単独での対艦攻撃といった運用を可能とする攻撃力を獲得していた。ただし、高速戦闘では自機の照準も定めにくいという難点があったという。

■メガ粒子砲

主兵器となるメガ粒子砲は機首に配され、クチバシのようなカバーで覆われた構造となっている。このメガ粒子砲は扇向型だったと言われ、ある程度の射角の修正が可能だったと推察される。また、本兵器がMS用の移動砲座に転用されて「スクワレ」が開発されることとなった。



上は砲撃のカバーを展開した状態。中央の円形部分がメガ粒子砲の砲口で、砲撃は完全に内蔵されている。



メガ粒子砲を稼働するビッグロ。ビームの収束率は高かったとされるが、対MS戦闘に十分な威力を有していた。



砲出したメガ粒子砲の砲口部分。17,800 kWという大出力のジェネレーターによって駆動を実現している。

■大型クロー

AMBAC型として機体前部に付けられた2基のマニピュレーター先端は、3本爪のクローとなっている。これは打撃戦を想定した兵器で、ルナチタニウム合金の装甲を貫くほどの強度を有していた。また、このクローにMS-14 ギルグのビーム・ライフルを持たせることが可能だったとする説もあるが、運用例は確認されていない。

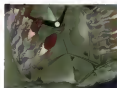


クローは鉤状に折れ曲がった形状が特徴で関節機構を備える「クローアーム」と呼ばれる構造もある。

クローは巨額の装甲を超過する威力を有するだけでなく、MSを噛む程度の瞬間的な動作も可能だった。

■ミサイル・ランチャー

機体上部の左右にはミサイル・ランチャーを4基ずつ内蔵している。ミサイルの装弾数は不明だが、実戦においては複数回の発射が確認されている。単純な打撃力としてだけでなく、ミサイルの弾幕を張って敵機の行動を阻害し、高速戦闘を有利に展開するといった戦法にも用いられた。ただし輪軸が固定された兵器のため、機体の進行方向にしか射界を確保できなかった。



ミサイルを発射するビッグロ。8連のミサイル・ランチャーは扇形射撃が可能で、制圧力に優れた兵器だったと言える。



ミノフスキー粒子散布下ではミサイルの誘導は期待できず、自照準を頼りに撃つことしかできなかったとされる。



MA-05
BIGRO
Rear view

MS 機体解析



MA-04X ZAKRELLO

ザクレロ

MA-04X
ZAKRELLO
front view

SPEC

全高：不明
全長：不明
全幅：不明
全機重量：不明
ジェネレーター出力：不明
スラスター数：不明
武装：ビーム・マシンガン2、拡散ビーム砲、4連装ミサイルランチャー2基

ザクレロの開発段階については推測あり、デモトリーによる世界出張やア・バオア・クー攻防戦への投入などが挙げられる。

ザクレロのテストパイロットはデモトリーが兼ねた。ビグロを使ったトクワンの機下で、彼を倒っていたという。

MA 開発の試行錯誤のなかで生み出され、失敗作の烙印を押された公国軍の試作機

MA-04X ザクレロはビグロに先行して開発が進められた試作MAだが、成功例とも言えるビグロとは対照的に、満足な結果が得られなかった機体だった。ビグロ同様、宇宙空間における高機動性とビーム兵器の搭載に主眼を置いて設計された本機だったが、度重なる設計変更や開発メーカーの小手際によって計画は大幅に遅延。先行機に遅れて完成した機体は加圧性能こそ優れていたものの、良好

な運動性を得られなかった。また、搭載されたビーム兵器（拡散ビーム砲）の有効射程も短く、対MSの高機動戦闘には適さない性能となってしまう。その結果、本機は小型宇宙艦レベルの兵器と評価され、実験段階で計画が破棄されることとなった。一般的には前述の型式番号で知られるが、公国軍が完成機の性能を疑問視したことから型式番号自体が与えられなかったとする説もある。

機体比較



RX-78-2
GUNDAM
18.0m

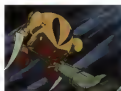


MA-04X
ZAKRELLO
unknown

ザクレロは機体テストの直前に破棄された機体だったためか、スペックに関する正確な数値は伝わっていない。特徴的な機体形状も特徴のひとつであり、当時のMAの例に漏れず大型だったと考えられる（全長25mと見られる）。

要求性能を満たせなかった機体構造と ビーム兵器の搭載を中心とした兵装の構成

ザクレロの開発はMIP社によってカリフォルニア・ベースで行われ、AMBAC肢を備えた非人型機動兵器というビグロと同じコンセプトに基づいて設計された。だが、計画通りの性能を獲得できず、失敗作の烙印を押される結果となった。一説には、制式採用を逃したのちに各種兵器のテストベースとなり、カリフォルニアベース第3試験センターで拡散ビーム砲の試射が行われたという。その後、フロリダのケープカナベラル宇宙基地からジョン本団に送られる途中、誤断出撃で失われたとされる。



トクワンの仇討ちのために前線で奮闘し、ハヤト・コバヤシのRX-75ガンタンクと交戦したと伝えられる。



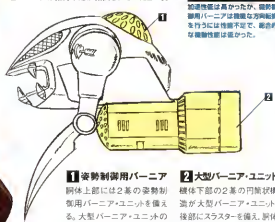
無断出撃したという罪では、アムロ・レイのガンダムMAモードのビームサーベルによって破壊されたという。

機体構造

ザクレロは半球に近い形状の胴体に大型バーニア・ユニットと胸部を設けた機体構造を特徴とし、複階式のメイン・カメラを採用している。胴体後部には4基のメイン・スラスターを有するが、一度にはメイン・エンジンとバーニアは推力不足が指摘されていたという。



加速性能は高かったが、姿勢制御用バーニアは微細な方向転換を行うには性能不足で、総合的な機動性は低かった。



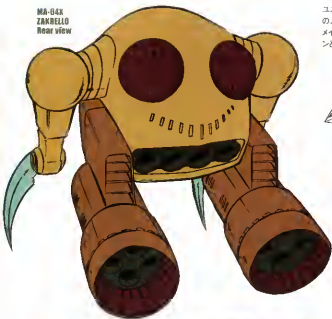
1 姿勢制御用バーニア

胴体上部には2基の姿勢制御用バーニア・ユニットを備える。大型バーニア・ユニットの前部にも同型の機構を有するが、十分な性能ではなかった。

2 大型バーニア・ユニット

機体下部の2基の円筒状構造が大型バーニア・ユニット。後部にスラスターを備え、胴体後部メイン・スラスターとともに推進力を担っている。

MA-04X
ZAMBELLO
Rear view

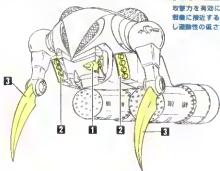


武装

ザクレロは一撃離脱戦法を想定して設計され、ビーム兵器の搭載が試みられた。だが、開発当時は収束型メカ粒子砲の小型化が困難で、本機には拡散型が採用されている。その射程の短さが仇となり、実用化は見送られたのだった。



攻撃力を有効に発揮するためには距離に接近する必要があった。しかし機動性の低さがその妨げとなった。



1 拡散ビーム砲

胴体前部中央に備える拡散ビーム砲は、レンジが広く命中率に優れていた。また、パワー・コンデンサーの性能が良好で、長時間の連射を可能としていた。なお、本兵装の技術はスクウレに流用されたと言われる。



2 ミサイル・ランチャー

左右の大型バーニア・ユニットの連結部前面には、4連装のミサイル・ランチャーを内蔵している。拡散ビーム砲が主兵装に位置づけられることから、補助兵装として運用されたと考えられる。



3 ヒート・ナタ

左右腕部の前腕に相当する部位にはヒート・ナタが装備されている。これはヒート・ホークの原理を応用した近接戦闘用兵装で、目標との相対速度を利用して威力を高めることが可能だったという。



MS 機体解析



MA-06 VAL-WALO
ヴァル・ヴァロ

MA-06
VAL-WALO
front view



MA-06
VAL-WALO
Rear view

SPEC

全長: 168.0m
全高: 122.9m
全幅: 45.0m
本体重量: 254t
全機重量: 379.6t
ジェネレーター出力: 36,000kW
スラスター推力: 720,000kg
機体材質: 不明
武装: 大型メガ粒子砲、ミサイル・ガン、機関・ガン
ム・ガンx2、110mm バルカン砲x4
リーダーモ



ビーム兵器による大
火力と高い機動性とい
う9公国軍MAの真
本コンセプトを具
した機体で、異性
質を有していた。



かつて公国軍の一角
として戦った重戦の
パイロット、ケリイ・
レズナーによって改
修され、フルバーニ
アンとの私闘を演じ
ている。

多様な機能を取り入れた設計が仇となり、 雌伏の時を経て戦場に躍り出た公国軍 MA

一年戦争末期に開発が進められながら、目の目を見ぬまま終戦を迎えたジオン公国軍MA——それがMA-06 ヴァル・ヴァロである。ビグロに続く型番号を与えられ、同機を発展させた設計が採られた本機は、さまざまな機能を盛り込んだ意欲的な機体でもあった。MAX-03 アッザムのアッザム・リーダーを発展させたプラズマ・リーダーなど、既存のMAのノウハウを取り入れた武装や機体構造を特徴と

し、高い戦闘力と多機能性を誇っていた。だが、多彩な武装が逆にMAとしての一貫性を損ない、開発計画は試験段階で破棄された。それでも終戦時にフォン・ブラウンへと移送された本機は、旧公国軍人のケリイ・レズナーによって秘密裏に改修が行われた。その後、U.C.0083に勃発したデラズ紛争において、RX-78GP01-Fb ガンダム試作1号機フルバーニアンと交戦している。

機体比較



RX-78GP01-Fb
GUNDAM
GP01 Fb
18.6m

MA-06
VAL-WALO
22.5m

全高こそビグロよりも低いが全長は15倍近く、全機としての機体サイズは大きく上回っている。大型化を期すにさまざまな機能を詰め込んだMAの異質とも言うべき機体で、デラズ紛争期にも異彩を放っていた。

ビグロの設計を受け継いだ機体構造と矛盾するコンセプトを内包した兵装群

ヴァル・ヴァロの開発においては、グラナダ工廠で生産されたビグロのうち2機がYMA-06の型式番号を割り振られたテスト機とされ、本機の原型になったとも言われている。その真偽は定かでないが、本機がビグロの設計を踏襲していたのは確かだ。機体後部に配された3基の大型スラスターと各部の姿勢制御用バーニアによって高い機動性を獲得していた。その性能は月面のような低重力環境においても十分に発揮され、デラズ紛争における実戦でも機動性に優れるフルバーニアンを断罪している。

■機体構造

ビグロに近い機体構造にグラブロのような曲面形状を採り入れたフォルムが特徴。装甲は極めて強度が高い。制ビームコーティングの装甲は連射距離からのビーム・ライフルの直撃に耐えるほどの性能を有していた。



姿勢制御用バーニアによって高い機動性を獲得していた。



メインカメラにはモノアイを備え、機体上部装甲の分割線がモノアイレールとなっている。



機体下部に3基の推進スラスターを備え(左)、推進スラスターで上のように前傾姿勢となる。

■コクピット

ヴァル・ヴァロのコクピット構造は第二期生産型のそれに近いが、内部スペースはより広く確保されている。また、一年戦争で左腕を失ったクリは設置した本機を修復する際に、片腕でも扱えるよう操縦系を改良している。



ワン・コントロール・スティックはジョイスティック状の操縦桿で、さまざまな機能を有する。



乗員のクリが操縦できるよう、コクピットの内部構造には大抵に手が届かされていた。

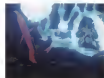


右はコクピット・パッチの制御機構。上部装甲が持ち上がり、内蔵パッチが露出する。

片腕での操縦を想定したワン・コントロール・スティック。基本的な動作はすべて可能。

■武装

多様な兵装を装備する点が、ヴァル・ヴァロ最大の特徴である。ビグロのコンセプトを受け継いだ大出力のビーム兵器に加え、プラズマリーダーやMAM-07 グラブロを参考にした格闘用クローなど、兵装の充実が特長に数える。しかし、高機動戦闘用のビーム兵器と格闘戦用装備を併設するなど、それぞれの兵装のコンセプトが矛盾していたことも事実で、そのままとりのなさが本機の評価を下げた。



プラズマ・リーダーは地面に固定する必要があり、肉弾的な近距離戦では使用できないという欠点があった。

1 大型メガ粒子砲



機首下部には大型メガ粒子砲を備える。通常は収納されており、発射時にカバーが左右に展開して砲身が露出する。ルナ・チタニウム合金の装甲を至近距離で溶解させるほどの威力を有する。



大型メガ粒子砲はヴァル・ヴァロの片腕のひかでも最大の威力を誇り、発射時にも目撃されたと見られる。

2 対空ビーム・ガン

機体前部の左右に格納された小型のメガ粒子砲。発射時にカバーが機内に引き込まれ、砲身が出現。



3 110mmバルカン砲

大型メガ粒子砲の下部には、110mm口径のバルカン砲が4基(左右に2基ずつ)装備されている。



4 ミサイル・ポッド

後部左右に2連装のミサイル・ポッドを基つづ備える。フルバーニアンとの戦闘では用いられなかった。



5 格闘用クロー

伸縮式の腕部先端にハサミ状の大型クローを有する。非使用時には機体に密着させるように収納される。



6 プラズマ・リーダー

広域高周波加熱システムとも呼ばれ、プラズマ境界を展開して範囲内の対象にダメージを与える。



MS 機体解析



MAM-07 GRUBRO
グラブロ



SPEC

全長:40.0m
全高:26.1m
本体重量:324.1t
全機重量:793.7t
ジェネレーター出力:11,000kW
スラスター推力:不明
装甲材質:不明
武装:クロー-X2, 7連発水中ミサイルランチャー
X2, プーメラン・ミサイルX2

MAM-07
GRUBRO
Front view



目標を追尾するセンサーや対潜探知機の搭載網を突破する性能が求められ、完成した試作機は潜水部隊によって運用された。



マッド・アングラー隊に所属するフラナガン・ブーンが搭乗し、部下の仇討ちのためにホワイトベースに攻撃を仕掛けた。

制海権を確保するために開発された 水中戦闘に特化したジオン公国軍の大型試作MA

地球降下作戦に続いて制海権の確保を図った公国軍は、海洋戦力となる水陸両用MSに並行して水中戦用MAの開発を進めた。その成果として誕生した機体が、MAM-07 グラブロである。汎用性の高い水中用MAは開発コストがかさむことから、運用を限定した数機種が同時に開発され、最初に完成したのが本機だったとされる。サンディエゴの潜水艦ドック（カリフォルニア・ベースの艦艇用ド

ライドックとも言われる）において3機の試作機が生産された本機は、メキシコ湾での機能テストを経て実戦に参加。南米大陸からの兵站を担う海上交通線を分断することで、欧州方面の連邦軍の戦力を倒ぐという運用が想定された。また、そのうちの1機（プロトタイプとも言われる）はシャア・アズナブル率いるマッド・アングラー隊に配備され、ホワイトベースとの戦闘に投入されている。

機体比較



ビグロをより水中戦闘の少ない形状に変更した印機が確認でき、機体サイズもビグロに近い。水中戦に対応した機動兵器としては当時最大級の機体で、既存の海洋戦力を凌駕する性能を発揮した。

ビグロをベースに水中戦特化の設計を施したグラブロの機体構造と各種兵装

グラブロはMIP社が開発を担当し、先行するビグロを設計のベースとすることで10ヶ月という短期間で試作機の完成に漕ぎつけた。その設計は水中戦に特化しており、水陸両用MSを凌駕する火力と運動性能を発揮した。一説には、本機をベースとした水中用ビート搭載機（MAM-07-X3 グラブロ試作水中ビート搭載型）などの開発計画も存在したと言われている。なお、ホワイトベース隊との交戦で撃破された機体を除く2機の試作機は、終戦時にマダガスカル沖で連邦軍に拿捕されたという。



マッド・アングラー等が搭載した、MSM-07 スコップロを降ろさせ、大西木でホワイトベースを攻撃した。



一瞬にはRX-78-2 ガンダムとの水中戦に及び、これを圧倒するもビーム・サーベルを受け、撃破されたという。

■機体構造

ビグロの設計を参考にしたグラブロだが、水中戦用MAとしての独自の構造が随所に見られる。そのひとつである推進機関は、機体後部に6基の熱核水流ジェット・エンジンを配し、単独で地球を一層するほどの航続距離を有していたとも言われる。また、モノアイに加えて強力なソナーを備え、進退の宗敵に対応した。



水中航行に最適化された機体形状が特徴で、高い機動性を有していた。



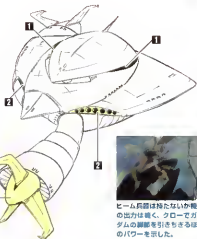
MAM-07 Grublo Rear view



熱核水流ジェットの威力は高く、ズゴックを牽引して航行中のホワイトベースに追いつく航行性能を示した。

■武装

グラブロは水中戦に用途を限定している。そのため、水中で威嚇するビーム兵器の搭載を見送り、ミサイルを中心とした兵器を重視している。ただし、量産計画においては機首にメガ粒子砲の装備が予定されていたという。



1 ブーメラン・ミサイル

機体上面の左右に内蔵された対空・対艦ミサイルで、安定翼の形状からこの名称と呼ばれた。主に水上への攻撃に用いられ、目標に突き刺さってから爆発する徹甲榴弾に近い機能も有していたと見られる。



2 7連装水中ミサイル・ランチャー

機体前面の左右に計2基が装備された、水中発射が可能なミサイル・ランチャー。典拠発射器とする説や、8連装なのには8連装とする資料も存在する。対艦攻撃を想定した本機の主兵器だったと考えられる。



3 クロー

左右の腕部先端に3本爪の大型クローを備える。クローは可動式で、目標を掴むような動作も可能。水中から艦艇を攻撃するための兵装と言われ、非使用時には整流効果を高めるために腕部が後方に収納される。



ビーム兵器を持たないが機体の出力は高く、クローでガンダムの脚部を引きちぎるほどのパワーを示した。

関連MS ラインナップ

MA-05 BIGRO ビグロ

地球連邦の
新機軸を
分断する
水中用MA



制式採用を
見送られた
異形の
宇宙用MA



艦隊戦での
急先鋒を
託された
強収型MA



■MAM-07 グラブル

ジオン公国軍のMA（モビルアーマー）開発計画は進捗が進行して進行していたが、なかでも早期に実戦投入されたのがグラブルである。同じMPP社製の宇宙用MA ビグロも開発ベースとしたことから、開発着手から約一か月半という短時間で完成。開発された熱核水流ジェット・エンジンに極めて高出力で、同機種の水陸両用MSよりも火力・運動性能で秀でた。さらに航続距離は単機で地球一周を可能にするほどだ。



機体前面にフレキシブル・アームと大型クローを装備。機内と繋がる機体の装甲を機内に設置するだけの防御能力を獲得する。

■MA-04X ザクロ

グラブルやビグロに先駆けて開発されたものの、単機なる設計変更や開発メーカーの不振によって完成が大幅に遅れたとされる。公国軍宇宙用MA、機体タイプのメイン・カメラや「口」を象徴としたメガ粒子砲。制式のミニビュレーター（ビート・ナタ）など、他の機体とは一線を隔するデザインが特徴。開発中の事故の表れとされるが制式配備には至らず、宇宙空間での機動試験を前に計画は放棄されている。



主兵器のメガ粒子砲はパワーコンデンサーの導入によって連続と長時間同時射撃が可能。ただし射撃が強いという欠点がある。

■MA-05R ビグ・ルフ

ビグロをベースに改修された対艦型仕様の強収型機。ベース機の圧倒的な機動力を活かした一撃制敵戦法を基本としており、機体下部に全長100mほどの大型ミサイル搭載用パイロンを追加。これによる機動力低下を補うべく、機体上部に追加ブースターを2基搭載している。結果、艦隊への打撃力は格段に向上したが、弾薬するには強い艦のある機体となってしまう。パイロットにも相応の技量が必要とされる。



ベース機のビグロも推進性能や機動力に優れるが、本機はそれを上回る能力を有しており、結果的にパイロットを必要とする機体となった。



フレキシブル・アームの代わりには推進力増強のための水中用ビットを装備。機内と繋がる機体の装甲を機内に設置するだけの防御能力を獲得する。



サイコミサイルと有線式メガ粒子砲を装備した、ニュータイプによる運用を前提としたMAタイプは、コクピットはタンデム式を採用している。



ビグロ同様、機体構造にミサイル発射管を有する構造になっている。これは対艦攻撃専用でなく、自衛用装備と思われる。

第003技術試験機
所属の技術士官オリ
グァー・マイが搭載
し、ア・バオア・クー
防衛戦に参加。友軍
側の救出成功を導く
ための、最後まで
奮闘した。



元公国軍宇宙空軍
のナリ・レスナー
が搭乗。本機を宇宙
圏にデラース・フリ
ートに参戦するつもり
だったが、戦場を理
解しに失敗した。



「一年戦争最後の
ニュータイプ」と呼ば
れたラム・ロレイが搭
乗することで、戦場
の最も重要な戦況を
記録。ガンダム
の名を知らしめた。



友軍側の
母機として
運用された
大型機



一年戦争後、
秘かに
改修された
試作MA



戦局打開に
大きく
貢献した
白いMS



■MA-05Ad ビッグ・ザング

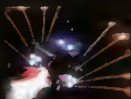
「戦艦前線砲撃隊」のコンセプトで開発されたビッグ・ザングは自ら参戦するよりも、前線における友軍MSやモビルボットの補給と応急修理役としての機能を与えられた大型MAである。ビッグロを管制ユニットとして使用し、その下部に接続された大型コンテナ（Adユニット）が補給と修理を担当する。その一点を評価する限りは絶えているもののビッグロの利点だった機動性は大きく損なわれており、開発に成功した機体とは言えない。

■MA-06 ガウル・グアロ

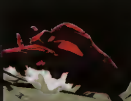
一年戦争末期の公国軍が開発したMAで、既存MAの長所を積極的にビッグロに取り入れた発展型とされる。そのためMAの開発理念（汎用性ではなく、特定条件下で圧倒的力を発揮する機動兵器）を十全に発揮しており、機動性と火力を高い次元で両立させることに成功。ビッグロ以上の加速性能を活かした高機動戦術向きの機体となった。ただし一年戦争では実戦投入されず、試作機3機の製造に留まったとされる。

■RX-78-2 ガンダム

公国軍の大型兵器に対抗すべく、地球連邦軍が実施したV作戦によって開発された機体。コストを度外視した設計と性能が盛り込まれた結果、わずか3か月半の運用期間にもかかわらず、歴史的な結果をあげた。これにより公国軍だけでなく連邦軍内部からも評価の目で見られるようになった。さらに一年戦争後は本機の設計をベースとした派生機が誕生。ガンダムタイプの始祖としてMS開発史上に記録されている。



ビーム砲撃隊
射撃を担い、前線
からのビームの
攻撃にも耐えられ
る。ただし機動性
が低いので、戦況
的に不利な選手と
する。



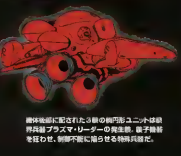
U.C.0083、月面
都市ファン・プラク
ンを襲撃したガウ
ル・グアロは、ガ
ンダム試作1号機フ
ル・ニアンと交戦、
撃破された。



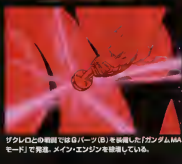
グラボとの水中
戦では片足を損
傷させられて劣勢
に陥ったが、コク
ピットにビル・サ
ーベールを安
立て、相手を決っ
ていく。



ア・バオア・クー防衛
でビッグザングの補給対
象となったモビルボッ
ト・オグロ。決戦兵器として
参戦された。



機体後部に配された3機の機動ユニットは戦
場兵隊プラスマリナーの発生後、戦場を
往々。制空権に陥る特殊兵器だ。



ザクレとの戦闘ではBパーツ(B)を装備した「ガンダム
モード」で対戦。メイン・エンジンで稼働している。

MSパイロット——トクワン／デミトリー——

“赤い彗星”の下でホワイトベースと対した ジオン公国軍のモビルアーマー乗りたち

トクワンとデミトリーは、ジオン公国軍の初期MA運用に携わったとされるパイロットたちである。一年戦争末期にシャア・アズナブルが指揮して宇宙に上がったザンジバル級機動高洋艦は、ビグロの実戦テストを準備していたとされる。そのパイロットとしてザンジバルに乗艦していたのがトクワンであり、シャアの補佐を務めた人物だった。一方のデミトリーはトクワンの部下で、試作MAであるザクレロのテストパイロットだったという。一説に、ジャブローを奪ったホワイトベースに対してシャアが追撃戦を展開した際、ふたりはそれぞれMAを駆って戦闘に参加したとも言われている。ただし、一般的にはホワイトベースとの戦闘で彼らがパイロットとして出撃した記録はないとする説のほうが有力である。



トクワンはパイロットでありながら、ザンジバルの元々の乗組員としてシャアを輔佐した。ほかの乗組員からの人望も厚く、デミトリーはトクワンを慕っていた者のひとりだった。



トクワンが搭乗したヘルメットには、ドクロのマークが施されていた。

トクワン Tokwan / デミトリー Dimitri

[[DATA 年齢：不明 所属：ジオン公国軍 階級：少尉 能力：MA操縦

[[DATA 年齢：不明 所属：ジオン公国軍 階級：曹長 能力：MA操縦



トクワンはビグロの機体に乗る運用型パイロットで、本戦でも高機動機体でガンダムを追い詰めた。



デミトリーは上官であるトクワンの強い命令を盲信し、ザクレロで無断出撃したといわれている。



デミトリー



出っ歯が特徴のデミトリー、着用したノーマルスーツは通常のものだった。

▶異説におけるふたりの戦い

一年戦争の異説では、シャアは宇宙に上がった直後にザンジバル単独でホワイトベースへの攻撃を行ったとされる。その際、トクワンはビグロで出撃し、セイラ・マスのGフル・イージーを一時的に初撃不能に追い込んでいる。さらに、アムロ・レイのRX-78-2 ガンダムをも翻弄したが、反撃を受けて撃破されたという。デミトリーはトクワンの仇討ちのため、シャアに側面からザクレロで出撃。ハヤト・コバヤシのRX-75 ガンタンクを圧倒するも、アムロのガンダムGパーツB装備に敗れた。

▶仇討ちを止めたシャアの意図

シャアがトクワンの仇討ちを画断するデミトリーを止めたのは、戦況を冷静に分析したからこそであった。



トクワンの死を知ったデミトリーは即座に仇討ちを上申したが、シャアは機会を得ようとしていた。

▶MAIN MS

MA-05 ビグロ

公国軍が開発した宇宙用MA。高い機動性を誇り、トクワンの乗機以外にも数機が実戦投入された。



MA-04X ザクレロ

開発途中で計画が破棄された公国軍の試作MA。シャアが指揮したザンジバルに搭載されていたという。



MSパイロット——ケリィ・レズナー——

忘れ去られたモビルアーマーとともに 雌伏の時間を過ごした隻腕のパイロット

ケリィ・レズナーは宇宙攻撃軍に属して一年戦争に身を投じた公国軍のパイロットで、アペル・ガトーの戦友でもあった。だが、戦いのなかで片腕を失って戦線離脱を余儀なくされ、失意のまま終戦を迎えることになる。その後はフォン・ブラウンでジャンク屋を営む一方、秘匿するヴァル・ヴァロの改修を進めていたケリィだったが、U.C.0083のデラース・フリートの決起によって私機を迎える。挫折を味わった連邦軍のパイロット——コウ・ウラキに自らの姿を重ねたケリィは、戦士としての自分を見つめ直して再起を決意。しかし、隻腕の自分がパイロットとして必要とされていないことを思い知らされ、ガンダムを倒して自らの誇りを取り戻そうとしたのだった。



機体改造の来。工房で最前線のコウと出会ったケリィは、自らのジャンク屋で復讐する。そして、真面目な改造士としてコウの助力の下、ヴァル・ヴァロの改修を完成させる。

ケリィ・レズナー Kelley Layzner

DATA

年齢：不明 所属：ジオン公国軍・宇宙攻撃軍→民間人
階級：大尉 出身：不明 能力：MS・MA操縦



デラース・フリートに加わるべくシーマと接触するが、のちに自分が用済みであることを知らされる。



ともに戦う仲間、チャップラに叛意を抱きながらも、戦士としての自覚を失ってしまっていた。



▶ デラース紛争の陰で起こった戦い

U.C.0083 11 02、アルビオンを脱走したコウと出会ったケリィは、行き場を見失った彼の面倒を見た。その一方で、シーマ・ガラハウと接触し、ヴァル・ヴァロを手土産にデラース・フリートへの参加を固めた。だが、シーマが欲しているのがMAだけと知ったケリィは引き直しを拒み、同月4日に単身ガンダムに戦いを挑んだ。そして、月面での一闘でRX-78GP01-1b ガンダム試作1号機フルバーニアを追い詰めたが、ヴァル・ヴァロは撃破され、ケリィも乗機と運命をともにしたのである。

▶ ガトーとの友情

ケリィの師匠はエースとして名高いガトーも認めるほどで、ガトーはケリィに宛てて復帰を期待するビデオレターを送っていた。



かつての戦友の誘いはケリィの心を揺らかした。



ジャンク屋を営んでいた頃のケリィ。外出時にはジャンパーを着ていた。



叛意を抱いてガンダムに襲い、そのパイロットがコウと知ってもなおパイロットの生き急ぎを誓った。

▶ MAIN MA

MA-06 ヴァル・ヴァロ
一年戦争末期に開発された公国軍MA。ビッグロの設計を受け継ぎつつ、さまざまな機能を盛り込んでいる。



ヴァル・ヴァロ機体のノーマルスーツは、一年戦争時のものと見られる。

ジオン公国軍が開発したMAは各地の戦線に投入され、地球連邦軍を相手にその能力を遺憾なく発揮することになった。

戦国の舞台となった地球



■北大西洋

北大西洋とヨーロッパの間に広がる大洋。両地帯を結ぶ海空航路が結ばれていたが、一年戦争では公国軍潜水艦部隊と水陸両用MS部隊による通商破壊作戦の頻りとされ、多くの艦船が海底の底に沈められている。

■地球衛星軌道

地球を周囲する衛星軌道の総称。気象観測や通信を司る衛星が多く浮く洋が低軌道から、月やコロニーへの中継点となるステーションが設けられた高軌道、地球の自転速度と同期するための静止衛星軌道など、いくつかのカテゴリに分類される。

■ア・バオア・クー

公国軍が建造した宇宙要塞。宇宙要塞ソロモンと月面都市クワダラ、さらにア・バオア・クーを結ぶラインはジオン公国本土防衛線に設定され、地球連邦軍との激戦りとなった。

■フォン・ブラウン

月面で最大規模の恒久都市で、「フォン・ブラウンを倒す者は宇宙を制する」と言われるほどの隆盛を誇る。

01

北大西洋での戦い

北アイルランドのベルファスト基地から出陣したホワイトベースを基幹とするマッド・アングラー艦隊は、北大西洋上で襲撃を仕掛けた。ブレンの電報を受けたシヤアは水中用MAグラブロと水陸両用MSによる攻撃を計画した。海中に飛び込んだガンダムが迎撃を試みたものの、艦上とは違って、海中では水の抵抗によって満足に動かせない。一方、水中での戦闘に特化したグラブロは機動性を駆使してガンダムを窮乏。ついに相手を捕獲することに成功したのだ。

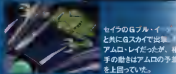


マッド・アングラー
ガンダム、ガンベリ

02

軌道上での遭遇

ジャブローで修理と補給を受けて宇宙へ上がったホワイトベースを、シヤア・アズナブル率いるザンジバル級機動巡洋艦が追跡。するとクワダラ少将がMAビグロの強襲を敢行した。本来、ザンジバル級はビグロの実験機のために開発されており、クワダラはビグロパイロットだった。そこにホワイトベースの追撃を余儀なくされたことで、予定されていた実験テストを中止にされた。喜んで出陣したクワダラはビグロの性能を遺憾なく発揮、ホワイトベースの迎撃部隊を一方向的に攻撃した。

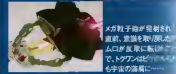


セイラのGブル・イー
と共にGスカイで出陣
アムロ・レイだったが、機
手の動きはアムロの予想
を上回っていた。

03

高機動戦闘の果てに

Gブル・イーとビグロがガンダムになったものの、ビグロの機動性はガンダムをも凌駕していた。高速からの一撃離脱戦法で、クワダラは連発にガンダムを追い詰めていく。だが阿波目かの攻撃後、アクシデントが発生した。それによって伸びたガンダムのマニピュレーターがビグロに引っかかり、そのまま引ずり飛ばされてしまったのだ。その際、突如の急加速に驚いたクワダラは息を失い、好機と見たクワダラは早速距離からメガ粒子砲の要害までめどめを射すのだが……。



メガ粒子砲が発射され、直撃。距離を取っていたアムロが反撃に転じたことで、クワダラはビグロも宇宙の真夜中に……

戦況の経緯

ザビ家による専制政治体制の確立を目指したのが一年戦争の正体と評する識者もいるが、本来の一年戦争の意義とは「地球連邦政府と連邦軍の体制下から宇宙移民者（スペースノイド）を解放し、自治権を獲得する」というものだった。宇宙という環境に適応した人類からは新たな種「ニュータイプ」が発生するだろうとのジオン・ダイクの子息に強い、地上からの支配を否定したのだ。しかし既得権益を脅かすとともに支配権限の座に固執する連邦政府関係者や富裕層はスペースノイドと対立した。その結果、連邦政府へ独立戦争を挑んだのがザビ家であり、これが一年戦争の発端である。

- ・1月3日 ジオン公国、地球連邦軍に独立を宣言。連邦軍基地に対するコロニー落としを敢行。
- ・1月15日 ルウム戦役、勃発。連邦軍艦隊が大敗、レビル将軍が捕虜となる。
- ・1月28日 ジオン公国、連邦政府への休戦条約締結の申し入れを行う。
- ・1月29日 レビル、脱出に成功。
- ・1月31日 レビル、「ジオンに兵なし」の演説を行い、兵兵器の使用禁止や捕虜の扱いを定めた「南極条約」締結。ただし休戦条約には至らず。

- ・2月7日 公国軍、地球機政戦を開始。
- ・2月13日 連邦軍、「V作戦」を立案。
- ・3月1日 公国軍、第一次降下作戦開始。
- ・3月4日 資源探検隊降下。
- ・3月11日 公国軍、第二次降下作戦開始。
- ・3月13日 公国軍、キャリフォルニアベース制圧。
- ・3月18日 公国軍、第三次降下作戦開始。
- ・4月1日 連邦軍、V作戦とピンソーン計画を発動。
- ・5月17日 公国軍、宇宙軍ソロモンを完成。
- ・6月 公国軍、本土防衛ラインを完成。

試作機での出撃

上官のボクランが目の前で散れ去ったことから、ザクロのテストパイロット・デズリーが負傷者を申し出た。しかしシャアはあえて許可を与えなかった。前回の戦いで母艦であるザンジバル級が沈没し、その修理中であったこともシャアが動かなかった理由のようだ。しかし納得できないデズリーは、シャアに無断で出撃。暴走、ホワイトベースに襲撃を仕掛けた。試作段階で放棄された機体とはいえない機動性は良好であり、遠撃に向かえばガンタンクを駆逐。回って現れたガンダムMAモード（通称、ガンダムバスター）に倒れしめる。だがガンダムのコンピューターで機内に隠された結果、すれ違いざまに機内爆発し、バスター・サーベルで貫かれ、ボクランの海を辿ることになった。

ビグロ戦からヒントを得て、アムロが改良したガンダムMAモード。MSともMAともつかない「準モビルスーツ」と呼ばれた。



ビート・ナタでガンダムに射撃部を破壊したザクロ、とはいえない準モビルスーツ。とはいえ必要とされたのはこのままであり、後にも前にも機内に撃破されてしまった。

ビート・ガンタンク、ガンダムMAモード

ア・バオア・クー攻防

一年戦争最終局面、サイド3本拠地への進攻を図る地球連邦軍に対して、ジオン公国軍は宇宙要塞ア・バオア・クーに絶対防衛圏を構築。連邦軍部隊を攻撃する作戦を実施した。しかし特異に移動する連邦軍を相手に、戦果は徐々に劣勢に傾いていく。そこで公国軍は完成したばかりの試作兵器の投入を決定。第603技術試験隊に対して、「機動総機動隊」の機能を持つMAビグランによるEフィールド防衛戦を実施するように命じた。実戦経験のない技術士官オプジャー・マイの操縦ながらもビグ・ラングは奇襲。少なくともボール6機、ジム2機、マゼラン級戦艦1隻、サラミス級巡洋艦5隻を撃破。撤退する連邦軍の活動を切り崩し、最後まで戦場に留まった。

モビルスーツ「オグ」に連携したビグ・ラングは、押寄せする連邦軍部隊を相手に奇襲。この戦術で対エース以上の大戦果を挙げている。



しかしビグロの最大の弱点である機動性を失った機体は敵の集中砲火の的となって撃墜。これは結局に成功し、技術試験に失敗した。

ビート・地球連邦軍

MAの出現とその意義

一年戦争にジオン公国軍が投入したMAは、MSとは異なる設計思想の下に生まれた。人型を模したMSはその高い汎用性によって従来の兵器に対して圧倒的な優位性を獲得したが、汎用であるがゆえに、特定の状況下では十分な能力を発揮できないという事態が発生した。その打開策として、人型に固執せず、特定の目的（遠点防衛や撃破への強襲、大火力による殲滅など）に特化した機動兵器の開発が提唱され、これがMAの原点となった。また一年戦争中期以降の公国軍は、地球連邦軍が投入したRX-78 ガンダムの超絶的機動性に脅威。その結果、ビグロに代表される高機動タイプとビグ・ザムのような大型・同地戦タイプ、さらにエルメスのようなNT専用MAが相次いで誕生した。



MSを上回る能力を獲得したMAだが生産性は低下し、量産型とされたビグロですら十数機の生産にとどまっていた。

大戦末期、連邦軍はジムを主力とする特殊戦術部隊「真白の狼」というMAは真逆の戦術で公国軍を圧倒している。



月面での知られざる戦い

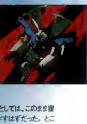
U.C.0083.11.04、旧公国軍MAヴァル・ヴァロが月面都市ファン・ブラウンに接近。AE（アナハイム・エレクトロニクス）社リブモア工場で改修作業を委ねたガンダム試作1号機フルバーニアンとの「決闘」を申し込んできた。パイロットのケリ・レズナーはデラズ・フリート入りを希望していたが、シーマ・ガラハウの企みによって希望が潰れてしまい、自身とヴァル・ヴァロの實力を示そうと考えたうえでの暴挙だった。月面都市を人質にされ、彼等もできず、やむなくウ・ウキがフルバーニアンで出撃。月面とさながら戦線が広がられることになった。圧倒的な運動性でヴァル・ヴァロを寄せ飛ばす防衛行動、さらに腕のプラズマリダーを用いたヴァル・ヴァロはフルバーニアンを圧倒すると思われたのだが……。



ヴァル・ヴァロに搭載されたプラズマリダーは、この戦いで初めて決裂。プラズマエネルギーを生み出す特殊兵器。宙空間内に入った機体は感知不能に陥り、精密兵器の破壊やパイロットへのダメージといった軍用を意図して戦われる。



本軍の戦術もあって結果から見たフルバーニアン。一カ、ウ・ウキが攻撃の手を緩めず、ついにクローアームで撃破した。



ケリとしては、このまま勝利はつぎはずだった。ところが下半身を分離したフルバーニアンが軍倉の一角を受けてしまった。

ビート・ガンダム試作1号機フルバーニアン

U.C.0079

- ・9月18日 サイド7にて史上初のMS同士の戦闘が発生。
- ・9月23日 ホワイトベース、地球に降下。
- ・11月7日 連邦軍、オデッサ作戦開始。
- ・11月24日 グラブリ、北大西洋でホワイトベース隊と交戦。
- ・11月30日 公国軍、ジャブローへの降下作戦開始。
- ・12月 ビグロとザクロ、ホワイトベース隊と交戦。
- ・12月31日 ア・バオア・クー攻防戦、開始。

U.C.0083

- ・11月4日 ヴァル・ヴァロ、フルバーニアンと交戦。

MAというカテゴリーの衰退

一年戦争中期以降、ジオン公国軍によって実戦投入されたMAだが、戦後は第一線に現れなくなった。これにはMS開発技術の発達も関係している。汎用性と特定条件下の機動性にかけて後者を重視したMAだが、可変機構の実現によって、その両立が可能になった。キャプランやアサシマーに代表されるTMA（可変MA）、ZガンダムやガザCなどのTMS（可変MS）がこれに相当する。非可変式のMAは決戦兵器や特殊用途としての性格を強く、生産数も限定された。

TMAのアサシマーは、MA形態に変形することで航空機並みの飛行能力と優れた機動性を発揮できる。



WR（ウェーブライダー）に定形して大規模再突入に挑むZガンダム。これこそ可変機の登場でMAを併用した。

MSと対をなす存在といえるMAは、特定のフォーマットを持たず、人型に制約されない兵器だった。そのなかでもビグロは、完成した機体のひとつで、様々なバリエーションが展開された。

KEYWORD

◆モビルアーマー

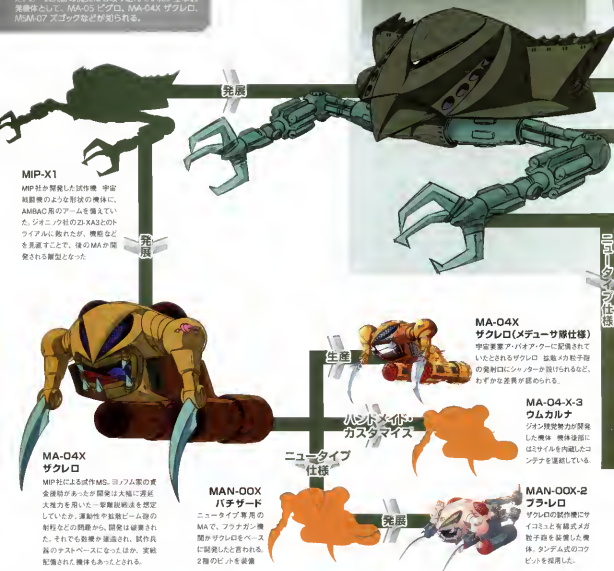
ジオン公国軍が開発した無人型の兵器で、正式名称は「Mobile A.R.M.O.U.R. (All Range Maneuverability Offence Utility Reinforcement = 全領域汎用支援火器)」だ。大推力とメガ粒子砲を備えた機体が多く、その戦体サイズからサイコミュ搭載機も試作された。

◆MIP社

ジオン公国の兵器メーカーのひとつ。同社が開発した試作機であるMIP-X1を改造し、MAを開発した。ビーム兵器の開発にも取り組んでいた。主幹機として、MA-05 ビグロ、MA-04X サクレロ、MSM-07 ズゴックなどが知られる。

MA-05 ビグロ

ジオン公国軍が優先し、実際に投入した最初期のMA。開発はMIP社が担当し、同社製のMIP-X1を発展させることで完成させた。熱核ロケット・エンジンによる大推力と、1対のクローアームをAMBAC機とすることで高い運動性を獲得。機体は従来のキャバルリアベースで行われた。初期型に分類される機体は12〜14歳が開発され、そのうち数機は新機種のテストベッドとなった。また、後期型をはじめ、数種類のバリエーションが開発されたことも知られる。



ニュータイプ仕様

加速強化

運用

MA-05R ビッグ・ルーフ

ビッグロの強化型にあたる機体。戦艦隊への攻撃が目的で、機体下部に大型ミサイルを装備する。重量増加による機力を犠牲のため、2基のブースターを増設。3機が本仕様で改修されたとされる。

装甲強化

MA-05M ビッグロ・マイヤー

ビッグロの装甲とジェネレーター出力を強化したバリエーション。スラスターも増設されており、機動性も向上している。胸部も形状が変更されたほか、対MSビーム砲を追加するなど、攻撃力も強化された。

発展

MA-06 ヴァル・ヴァロ

ビッグロを改良、発展させる形で開発された宇宙用MA。ジオン公国軍が開発したMAのさまざまな長所を取り入れたことで、極めて多機能な機体として完成した。しかし、一年戦争では活躍の場は与えられず、U C 0063に月面において運用されるに至った。

水中用

MA-05Ad ビッグ・ラング

ア・バオア・ワー攻防戦の直前に完成した急造兵器。制御ユニットに、後継型にあたるビッグロの6号機を使用し、Adユニットを装着している。型式番号末尾の「Ad」は「Ammunition Depot=可動補給庫」を意味する。

ニュータイプ仕様

MAM-07-X3 クラブロ試作水中ビット搭載型

クラブロをベースとする試作MA。左右のクローを取り外し、水中用ビット用のパイロンを設置する。水中用ビットを操作するために複合通信システムやゾナードームなども追加で装着、試験運用のための、通常のクラブロに異なる。

MAM-07 クラブロ

ビッグロをベースとして開発された水中用MA。単独で地球を一周することが可能なほどの航続距離を誇ったと言われる。サンディエゴの潜水艦ドッグで3機が建造され、うち1機がマッド・アングラー隊に配備された。

AMA-X7 シャンフロ

U C 0096にジオン残党軍が建造した水陸両用の試作MA。第一次ネオ・ジオン戦争時の設計案をベースに「機付き」の援助を受けて完成した。大口徑メガ粒子砲に加え、拡散メガ粒子砲、リフレクタービットなどを装備



AMA-X2
ノイエ・ジール





メガ粒子砲

宇宙世紀を代表する指向性エネルギー兵器であるメガ粒子砲は、突出した火力を有するうえ、小型化も進んでいる。艦砲やMS用のビーム・ライフルなどとして広く採用されており、この傾向は誕生から80年以上を経たザンスカル戦争においても変わっていない。





ミノフスキー物理学系の 高性能ビーム兵器

MAWS (Minovsky-theory Applied Weapon System=ミノフスキー理論応用兵器体系)あるいはMBW (Minovsky Beam Weapon=ミノフスキー粒子兵器)と呼ばれるミノフスキー物理学を応用した兵器技術のなかでも、指向性エネルギー兵器として知られるものが「メガ粒子砲」である。このエネルギー兵器はムサイ機体巡洋艦をはじめとする宇宙艦艇の主砲、MSM-03 ゴッグやMA-05 ビクトロといった機動兵器の主兵器などとして広く採用された。RX-78 ガンダム用に代表されるビーム・ライフルもメガ粒子砲の一種だ。

メガ粒子砲は、ミノフスキー粒子を輸送・融合させたメガ粒子を「垂直道」で発射する兵器で、ピンポイントの火力は核兵器に勝るとまでいわれる。ほかに、85%以上に達するエネルギー効率(レーザー兵器の約4倍)、小型化が容易、防御技術の限定など、火力以外のメリットが多い点も特徴となっている。

こうしたメリットが高く評価され、一年戦争直前には指向性エネルギー兵器の大半を、メガ粒子砲が占めることとなった。この状況は長らく変わっておらず、U.C.0150年代においてもメガ粒子砲の時代が続いている。

メガ粒子砲の登場と 加速度的な発展

メガ粒子砲が完成したのは、U.C 0070.05、ジオン公団でのことだった。ほぼ同時期に地球連邦軍でも実用化され、初期には艦砲や要塞砲などとして配備が進んでいた。

一年戦争の時点でメガ粒子砲は高度な火力を有しており、宇宙戦艦や宇宙巡洋艦を一撃で撃沈した例も多い。その一方で有効射程が短い（一説には1数km）、大気やビーム擾乱による減衰が著しいといった問題点も指摘されており、実体弾式火砲やミサイルとの併用例が少なかった。実際、ベガス後継機機体編組機ホワイベースは1砲を実体弾式、副砲をメガ粒子砲とした。もともと、射程を中心とした問題点は一年戦争後に改善されたうえ、火力や速射性なども向上していき、艦砲はメガ粒子砲にはば統一されるに至った。

高出力の熱核反応炉（融合炉）が必要なこと欠点だったが、一年戦争中期に実用化されたエネルギーCAPにより、MSでもビーム・ライフルとして装備可能となっている。

メガ粒子砲の特性

メガ粒子砲が、ほかの指向性エネルギー兵器より評価されるのは、火力、エネルギー効率、コンパクト性といった特徴による部分が多い。亜光速とまでいわれる弾速、磁場導達の影響を受けにくい電気的な中性、それらによる高い命中精度（照準補正の必要性が少ない）も特長で、欠点を補って余りある火器となっている。

■メリット

1 大火力と高いエネルギー効率

ほかの指向性エネルギー兵器と比べて火力に優れるうえ、レーザー兵器の4倍近くに達する85%以上のエネルギー効率を誇る。同じ動力源を用いた場合、メガ粒子砲はレーザー砲の4倍近い火力を発揮できる計算となる。その威力は圧倒的で、MAアプサラス用は核爆発にすら耐えるジャブローの岩盤を貫通可能とされた。

2 小型化と必要出力の軽減が可能

当初、メガ粒子砲は艦砲や要塞砲といった大型モデルが多く、その稼働には高出力のジェネレーターが必要であった。だが、MSの発展にともないメガ粒子砲の小型化が進められ、ビーム・ライフルは全長9m程度がそれ以下まで小型化。さらに比較的低出力な機体でも使用可能となり、MSの主兵装として普及した。

3 兵站への低い負担

兵装ごとに異なる弾薬が必要な実体弾式火器と異なり、メガ粒子砲は「弾の元」となるミノフスキー粒子を融合炉から得られるため、兵站への負担が小さい。消耗品の交換は必要となるが、実体弾式火器のように「ザク・マシンガン本体はあるのに、弾薬がザク・バズーカ用しかないため使用できない」といった事態になりにくい。

■デメリット

1 間接照準射撃が不可能

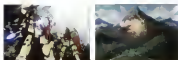
メガ粒子砲は、ビームを収束が拡散が放射できない。つまり、直線上が属状の散布界にいる目標しか攻撃できず、身を隠した敵機を撃破するには障害物ごと排除するが注目の必要があるこれは、重力下においてもビームが後落しないことを意味し、実体弾式火器のような山なりの弾道を利用した間接照準射撃が困難である。

2 「弾種」の不在

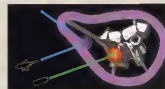
砲弾の不在は兵站面での利点だが、それゆえに多用途性が低い欠点もある。実体弾式火器は対装甲貫通力を重視した徹甲弾、飛躍中に起爆し砲弾片を散布する榴弾、大量破壊兵器の核砲弾など様々な弾種が存在しており多用途性に秀でる。メガ粒子砲も発射モードの切り替えが可能だが、選択の幅は大きくない。

3 対抗手段の登場

メガ粒子砲（特に初期のモデル）は空気中や水中での減衰が大きい欠点があり、絶対的な攻撃手段ではない。また、ビーム減衰ガスを散布するビーム攪乱弾、メガ粒子をほぼ完全に遮断する1フィールド・ジェネレーター、ビーム・ライフル程度なら問題なく防衛するビーム・シールドなどの対抗（防御）手段も実用化された。



核反応に耐えるMSの装甲を穿々と貫通、核兵器ですら破壊困難な岩盤を融解させ、地形を変えるほどの破壊力を実現



TECHNOLOGY INFO

メガ粒子砲以外的大型ビーム兵器

メガ粒子砲以外にも様々な指向性エネルギー兵器が模索された。メガ粒子砲の黎明期には特にこの傾向が強かったようで、公団では次世代攻撃兵器開発総合プロジェクトにおいて様々なビーム兵器が試作されている。そのひとつが全長231.0mの植熊会超大型プラズマ・ガン「QCX-76A ヨルムガン」と呼ばれた大型火砲である。



ザンスカール帝国の戦術衛星カイラス・グリーの超大型砲「ビッグ・キャノン」も核融合の巨大ビーム砲とされる。



核融合プラズマ・ビームを放射する試作兵器。理想環境での有効射程は2万km強もあり、宇宙戦艦を一撃で轟沈せしめた。

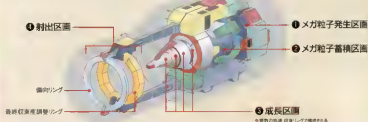
メガ粒子砲の構造

メガ粒子砲は大規模な加速装置が不要なうえ、発射時に収束と指向性を与えるだけで高度な火力を発揮可能である。構造もシンプルで、発生区画、蓄積区画、成長区画、射出区画の4区画で構成されている。モデルによって発生区画の方式(シェネレーター直結、エネルギーCAP、メカコンテナーなど)や成長区画=砲身の長さや形式といった違いはあるものの基本構造は変わらない。なお「大規模な加速装置が不要」と述べたが、成長区画の加速リングと収束リングの増加によって火力や射程を伸ばすこともできる。



発生区画の方式こそ異なるが艦載型とヒーム・ライフルの基本構造は、誕生から80年以上を経て同じである

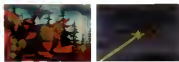
艦砲やMS用機行兵装では細部に違いがあるとはいえ、メガ粒子砲の基本構造はこの図に示した通り。全体が4つの区画で構成されており、なかでも「①射出区画」は砲の火力や射程を、「②射出区画」はメガ粒子の射出方向の変更を司る重要な部部、一方の「③発生区画」と「④蓄積区画」は砲の連射性能に関係している。



メガ粒子砲の発射プロセス

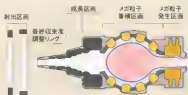
メガ粒子砲の発射プロセスは、発生区画のエネルギーコンテナーでミノフスキー粒子を縮退・融合させ、メガ粒子とすることから始まる(ヒーム・ライフルの場合、メガ粒子化直前のミノフスキー粒子が事前にエネルギーCAPに充填されており、わずかな負荷でメガ粒子化する)。ミノフスキー粒子の縮退には1フィールドが用いられ、縮退に

使われたエネルギーは(見かけ上の)質量をメガ粒子に付与する。蓄積区画に蓄えられたメガ粒子はビーム発生装置で解放され、成長区画=砲身を通過しつつフィールドによる収束と加速を続ける。そして、射出区画=砲口で弾道を修正・安定化され、発射に至るのである。なお、メガ粒子の質量の一部は運動エネルギーに変換される。



大出力型などは発射直前に砲口や砲身が発光するモデルが目立つが、ビーム・ライフルはタイムラグが少ない。

① 縮退・融合



② 生成・貯蔵

発生したメガ粒子を一定値になるまで蓄積する。



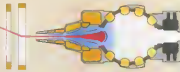
③ 収束・加速

メガ粒子を解放。収束・加速リングを通し、威力を増加させる。



④ 射出

偏向リングがある場合、目標に向けて弾道修正が可能。



TECHNOLOGY INFO

レーザー兵器

隣界半導体をはじめとする防衛技術の普及により、レーザー兵器は主流から外れた。だが牽制用などの補助兵器、広域破壊兵器コロニー・レーザーとして度々運用されている。



コロニーを破壊するレーザー砲に改修したソーラー・レイ。標的に巨大な砲にはメガ粒子砲よりもレーザー砲が適した。



アルビオン製のレーザー砲。UC0080年代前期、連邦軍は艦体防空用にレーザー砲を多用している。



頭部にレーザー・ビームを備えるカプセル。水陸両用MSではフォノン・メーザー砲などの装備例も。

TECHNOLOGY INFO

ビーム・サーベル

ビーム・ライフルはメガ粒子砲と同じくMAWSに属する兵器だが、そのビーム刃はメガ粒子ではない。融合に至っていない、高エネルギー状態のミノフスキー粒子である。



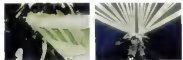
斬撃兵器ではビーム・ライフルと同じくエネルギーCAPを用いるが、メガ粒子との融合は行わない。



そのままではミノフスキー粒子が露出してしまいうため、1フィールドで刃身を形成・維持

メガ粒子砲の分類

ビーム・ライフルがメガ粒子砲の一種であることは既に述べたが、それ以外にもメガ粒子砲はいくつかのカテゴリーに分類できる。発射モード、メガ粒子の発生方式、砲身の形状などによる分類が代表的なものである。ただし、各メガ粒子砲がどれかひとつのカテゴリーにのみ属するのではなく、複数のカテゴリーにまたがっている例も多い。



収束と拡散が可能なクイン・マンサの胸部メガ粒子砲など、複数の発射モードやエネルギー供給方式を有するモデルも。

■発射モード

■収束

ビームを収束し、線状に発射するタイプ。射出区画に「フィールド」発生装置を設け、砲口部で発射角度の修正が可能なものは偏向型メガ粒子砲と呼ばれる。

UC 0089 年代中期の連邦軍宇宙艦艇が標準的に搭載した主力メガ粒子砲は基本的に収束型である。



■拡散

密閉的に収束率を下げ、シャワー状にビームを発射するタイプ。拡散メガ粒子砲と呼ばれ、MAでの採用例が多いが、この機能を持つビーム・ライフルも存在。

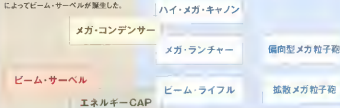
可変 MA サイズ・ガンダム型の拡散メガ粒子砲は砲口で拡散、飛翔後に収束するもの、収束型を濃縮化した例もある。



■メガ粒子砲の派生図

艦艇として誕生したメガ粒子砲はいくつかの派生形を生み出し、培われた技術によってビーム・サーベルが誕生した。

メガ粒子砲



■メガ粒子発生方式

■ジェネレーター直結式

核融合反応炉(ジェネレーター)から直接的に得られた電力をミノフスキー粒子を用い、メガ粒子を発生させるタイプ。大出力ジェネレーターが必要となる。



艦艇、MA、水陸両用MSなど大出力機が主に採用。ヴェスパーもこの仕様。

■エネルギーCAP式

融合炉からのミノフスキー粒子を蓄積しておく、エネルギーCAPを搭載した仕様。ビーム・ライフルの大半が該当し、比較的低出力なMSでも使用可能である。



エネルギーCAPを搭載可能としたのがエネルギーバックである。

■メガ・コンデンサー式

MS本体に内蔵したメガ・コンデンサーに充電することで、ミノフスキー粒子の圧縮を可能としたタイプ。出力は従来の10倍で、主に第四世代MSが採用。



ZZガンダムのハイ・メガ・キャノンが代表的なモデルである。

■砲身

■閉鎖型(物理砲身)

實體弾式の火砲のように、物理的な砲身を有するタイプ。砲身内は成長区画(収束リンクと加速リンクの準安定)である。大半のメガ粒子砲が該当する。



初稿には下記の閉鎖型も目立ったが、主流は開閉型砲身であった。

■開放型

砲身相当部分がフレーム状で、先端に射出区画を設けたタイプ。比較的古型に数見されるが、ガンダムシリーズのように搭載スペースが限られる機体でも採用された。



ホワイトベースが初期に搭載。

■半開放型(「コ」の字型)

パネル状の砲身を「コ」の字型に配置したタイプ。折畳みが容易、発生区画を兼用可能、高出力モデルに適するといった利点があると見られる。



Vガンダムのヒュー・スマートガン、フィン・ファンネルなどが該当。

MORE INFO

格闘兵装兼用型

メガ粒子砲の運用に関するハードルを下げたエネルギーCAPは、ビーム・ライフルだけでなくビーム・サーベルにも採用されている。これはビーム火器とビーム・サーベルの両立が可能なことを意味し、実際にビーム・サーベル兼用のビーム火器が複数実用化されている。



一年戦争時、ゲルググの一部などで試験的に採用されたという。戦後、ガンダム試作1号機も搭載している。

MORE INFO

低出力のビーム兵器

メガ粒子砲の小型モデルには低火力のものも存在する。車載用のビーム・ガン、目くらまし用の拡散ビーム砲などが該当するが、Vガンダムのビーム・ピストルのようにシステム・ウェポンの一部という例もあった。



低火力とはいえメガ粒子砲の一種であるため、命中箇所によってはMSを無力化させられる。



火砲として開発されたドムの拡散ビーム砲だが、出力不足から目くらまし用とされた。

F90 II Y クラスタ・ガンダムはビーム・バルカンを装備、実弾弾式と同じく車載用である。

ビーム兵器の普及と 新型メガ粒子砲の登場

メガ粒子砲は総論に大出力を必要とするため、初期のMSでは搭載困難であった。この状況を免れたのが、一年戦争中期に地球連邦軍が実用化したエネルギーCAPであり、MSでも使用可能な対行式メガ粒子砲「ビーム・ライフル」が完成。加速度的に普及していった。軍事予算や事留まりの問題からか、U.C.0080年代前期にはビーム・ライフルの装備率は減少したものの、U.C.0090年代後期に入るとほぼすべてのMSが標準的に装備するに至った。分離式のエネルギーCAPである「エネルギーパック」が普及し始めたのもこの頃である。

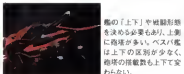
MS用メガ粒子砲の発展は続き、管制にMSを用いる大火力・長射程の大型ビーム兵器「メガ・ランチャー」、そしてメガ・コンデンサーによる直結式メガ粒子砲である「ハイ・メガ・キャノン」が登場した。なかでもMSに内蔵可能なハイ・メガ・キャノンは、ドライブに大出力ジェネレーターを必要とするものの、換兵器以外では最大級の火力を持つMS用兵装となっていた。ネェル・アーガンなど一部の艦艇では、コロニーレーザー級の破壊力を持つ「ハイパー・メガ粒子砲」が採用され、当時の火力重視の戦術環境を表現することとなった。

メガ粒子砲の搭載位置と搭載形式

艦船や戦艦兵器におけるメガ粒子砲の搭載位置や搭載形式(方法)は、合理性や設計の都合によって自ずと決まってくる。顕著なのが艦艇であり、旧世紀の海上艦艇同様、砲台として各部に搭載された。MSと比較して陸軍で構造のMAの場合、胴体の中央(機体の中心線上)に搭載するのが設計上、理想的といえる。

■宇宙艦艇

艦艇のメガ粒子砲は、射界を広くとれる砲塔形式で搭載される。ネェル・アーガマのハイパー・メガ粒子砲のように砲台域を持たないものも存在するが例外だ。宇宙で運用される都合上、全周向に攻撃範囲をとるため、砲底に砲塔を設ける艦も少なくない。



艦の「上下」や砲台形態を決める必要もあり、上側に砲塔が多い。ベスバは上下の区別が少なく、砲塔の搭載数も上下で変わらない。

■MS

MS用メガ粒子砲は手持ち式のビーム・ライフルがスタンダードであり、通常は右手に装備される。手持ち以外のメガ粒子砲の場合、統一的な搭載位置は存在しない。例えば支援用MSと対空MSでは仕様が異なるため、搭載位置に違いが生じる。MSの設計の自由度も、搭載位置が統一されにくい一因であろう。

汎用MS

ビーム・ライフルを手部に搭載。射界が圧倒的に広い。



「手持ち」であり、内蔵しない。

可変MS

MS・MA両形態で兼用可能なよう配慮されている。



ビーム・ライフルも兼用。

■MA

ザクIIやビグロなどの初期のMAは、メガ粒子砲を中心に設計されたとすら言える機体であり、胴体の中央にメガ粒子砲を配置した。ただし、MSと異なり定型が存在しないため、プラウ・プロをはじめとする有線攻撃機も搭載機やネオ・ジオングなどの半人型機は、メガ粒子砲の搭載位置が機体各部に分散している。



胴体に一対の可動肢を備える機体は、胴体中央への搭載例が目立つ。ニュータイプ機は末端部に搭載することも。

ただしMSは機体で、手持ちのビーム・ライフル以外、統一的な搭載位置が存在しない。ある程度傾向こそ見られるが、前腕、胸部、腹部、バックパックなど機体によって異なるのが実情だ。兵器の進化にともない兵装の搭載位置は統一されていくものだが、MSの場合、ビーム・ライフル以外の最適解が定まっていない。

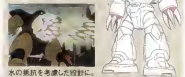


機体と機体をつなぐ前腕構造に、メガ粒子砲3基を搭載したムサイ級。攻撃範囲は前方180°ほど。

両腕の円形構造部にメガ粒子砲を搭載するネオタイプ。メガ粒子砲は使用時のみ展開するタイプ。

水陸両用MS

水の抵抗を軽減するため、前腕や腹部に内蔵する。



水の抵抗を考慮した設計だ。

第四世代MS

重火力の各種火砲を全身に搭載する機体もある。



ネオ・ジオンは搭載数が多い。

ビグロは胴体中央にメガ粒子砲を内蔵。MAとしては標準的な搭載位置だ。



ビグロのメガ粒子砲は機体のシャッターで閉鎖され、射撃時のみ解放する。

ゾディアックの射撃形態。機体を展開し、200m級のメガ粒子砲が露出。

TECHNOLOGY INFO

艦艇、MS、MA以外のメガ粒子砲

メガ粒子砲に先鞭をつけたジオン公国軍だが、艦艇や基地施設、MSやMA以外への搭載は実現しなかった(重機動砲座アッザムのような例外もある)。一方の地球連邦軍は、戦艦機やMS用支援機などにもメガ粒子砲を搭載した。なかでも多目的戦艦機コア・ブラスターやGファイターは強力で、高度な火力と機動性により、少なからぬMSを撃墜したのだ。



FF-X7Bstコア・ブラスターは、砲台ブラスターにメガ粒子砲を2門備えている。



コンベイトウ軍艦の防空用砲台工務艦。真下に3門のメガ粒子砲を含む。

一年戦争期の世界 (宇宙)

宇宙世紀最大の戦争となった一年戦争は、4つのサイコロを景観に迫りやうた。人類と機械の宇宙戦争でもあった。宇宙が主戦場となったのは戦争とて末期の短い期間に過ぎなかったが、その間は宇宙の勢力圏は劇的に変化したのだ。

人類が初めて体験した 宇宙戦争の舞台を振り返る

U.C.0079.01.01、宇宙には100億以上の人々が居住していたが、およそ2週間後にはその半数が失われてしまった。1月31日に一年戦争が勃発し、NBC兵器を無制限投入したジオン公国軍の攻撃により、サイド1-2・4・5が破壊されたためである。これが一年戦争の緒戦となった一週間戦争とルウム戦役であり、地球連邦宇宙軍も深刻な打撃を受けていた。

一年戦争の名称のとおり、地球連邦とジオン公国の宇宙戦争は約一年続いたが、しばらくの間、宇宙が主戦場となることはなかった。ジオン公国軍の地球侵襲作戦により最前線が地球に移行したうえ、半年に及ぶ戦線膠着が続いたためである。これは一年戦争の緒戦で破壊されたコロニー群が設置されたこと、宇宙におけるジオン公国の本土防衛ラインが強化されたことも意味する。

宇宙が再び主戦場となったのは、12月24日に発生したソロモン攻防戦でのことで、同月31日のア・バオア・クー攻防戦の直後、月面都市グラナダで終戦協定が締結され、一年戦争は終わりを迎えた。このように一年戦争において宇宙が主戦場となったのは短い期間だったが、その戦績はあまりにも大きかった。

一年戦争における宇宙の変化

下記の3種の地球圏マップは、上から順に一年戦争中期、一年戦争勃発時、一年戦争終結時を示している。一年戦争中期のマップが一般に「一年戦争期の地球圏」として認知されているもので、宇宙要塞ア・バオア・クー、宇宙要塞ソロモン、月面都市「基地」グラナダからなるジオン公国の本土防衛ライン、壊滅状態のサイド1・2・4・

5、L3宙域に設定された地球連邦軍の勢力圏などが見て取れる。この時期、ジオン公国は本国が位置するL2、ソロモンを固定したL5、グラナダを中心とする月の裏側の一部を勢力圏としており、優勢であった。緒戦で戦災を被らなかったサイド6は緩衝地帯や交渉窓口として機能しており、地球連邦、ジオン公国の橋渡し役となった。



地球の衛星軌道には艦隊を常駐させられず、両軍が地球・宇宙間の輸送ルートや往還路として利用した。

■一年戦争中期の地球圏



■一年戦争開戦時の地球圏



■一年戦争終結時の地球圏



LOCATION INFO

一週間の戦争を生き延びたコロニー

一週間の戦争の際、サイド1・2・4は公団軍の大規模攻撃を受けて壊滅したが、これはすべての各サイドのコロニーがひとつ残らず破壊されたという意味ではない。少なからぬコロニーが生存しており、のちの歴史的な事件に間与した。ただし、ルウム駐役におけるサイド5の生存コロニーは確認されていない。

■30 パンチ

サイド1・30 パンチ。反連邦政府デモが行われていたU.C.0085.07.30。ティターンズの機動隊が暴走。激発性の伝染病と公表された。



■シャングリ

サイド1・11 パンチ。第一次ネオ・ジオン戦争初期。エウゴ艦（アーガマ）とアクシズ艦（エンター）が入港し、数度にわたるMS戦が展開された。



■モルガルデン

サイド2・13 パンチ。アルプスを再現した観光コロニーである。グリプス戦役時、エウゴ、ティターンズ、アクシズによる戦闘で壊滅した。

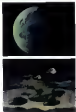


■一年戦争時の地球圏各地

ここでは、一年戦争時の地球圏（地球を除く）の主要宙域、つまり各サイド、月、宇宙要塞相対的な位置や当時の状況を解説している。7つのサイドのうち、サイド3とサイド6を除くコロニー群は深刻な損害を受けるが、ほぼ全滅。一方、両軍の宇宙基地は機能しており、軍事拠点としてだけでなく、宇宙艦艇や機動兵隊の開発も担っていた。

月

地球唯一の衛星。裏側に位置する月面都市グラナダは、歴史的にサイド3との関係が深く、開戦直後に公国軍が制圧。突撃機動軍の拠点とされた。他の月面都市は条約条約で中立地帯となり、連邦軍と公国軍は攻撃や軍事利用を禁止された。一方で反公国レジスタンスが活動。



サイド3（ムンゾ）

月の裏側に位置するサイドで、ジオン公国（以下「公国」）の本国。戦災はほぼ受けていない。政府コロニーの1バンチ・ズム・シディには公主行宮があり、ガルマ・ザビの国葬などの舞台となった。スラム同然といわれた3バンチ・マハルは、一年戦争末期にゾラ・レイトに改造されている。



サイド3（ジオン公国）



L2

グラナダ

ア・バオア・クー



ア・バオア・クー

サイド3と同じL2に固定された。公国軍の宇宙要塞。小惑星をふたつ接続した、傘のような形状が特徴である。連邦軍の「星一号作戦」の「星」は、この要塞を指す。一年戦争末期、キレン・ザビ総帥とキシリア・ザビ少将が直接指揮を執り、事実上の最終決戦が展開された。



ヘズン

L4宙域に位置した公国軍の小惑星基地。「ヘズン計画」と呼ばれるMS開発が進められたという。戦後、連邦軍が駐屯。



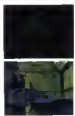
サイド6（リア）

一週間戦争直後に中立を宣言したサイド。ランカ政権は公国の後ろ盾で誕生しており、攻撃対象とならなかった。8バンチ・バルダに公国軍のニュータイプ研究所「フラカラン機関」が置かれる一方で、<リボー>では連邦軍のMSを秘密裏に受け入れるなど両勢力と通じていた。



ソロモン（コンベイトウ）

L5に固定された。公国軍の小惑星基地（宇宙要塞）で、宇宙攻撃軍の拠点。L5への移動と完成は開戦後のことで、ルウム戦役では一部部隊の出撃拠点となった。12月24日、連邦軍の「チェンバロ作戦」を受けて陥落し、以後は連邦宇宙軍の鎮守府「コンベイトウ」に改名された。



サイド1



ソロモン



L5

サイド4



サイド5



サイド2



L1

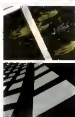
L4



サイド6

サイド1 (ザーン)

史上初のサイド。一週間戦争で公国軍の攻撃対象となり、多くのコロニーが破壊された。核攻撃を受けた13バンチはそのひとつ。ソロモン戦では、サイド1の残骸に連邦軍のティターン艦隊が秘密裏に布陣し、ゾラシステムを展開。ソロモン陥落の直接的きっかけとなった。



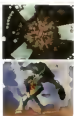
サイド4 (ムーア)

サイド1と同じL5に位置するサイド。一週間戦争で全滅に近い被害を受けた。戦後、コロニー再生計画の対象となった。



サイド7 (ノア)

月の反対側のラグランジュポイントL3に建設されたサイド。名目上こそサイドだが、一年戦争時は未完成の1バンチのみが存在しない。連邦軍の「V作戦」でMSの試験地となったが、公国軍の攻撃を受けて1バンチは放棄された。この際、史上初とされるMS同士の戦いが行われた。



サイド7



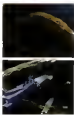
L3



ルナツー

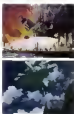
ルナツー

L3に置かれた地球連邦軍(以下「連邦」)の拠点。元々は資源採取のため地球圏に移送された小惑星ユノーで、全幅は180kmにも達する。サイド3から遠いためルウム戦役後も公国軍の大規模攻撃に晒されず、維持されている。宇宙での反攻作戦に備えて、宇宙艦艇やMSの生産も担当した。



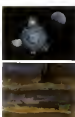
サイド2 (ハッチ)

L4に位置するコロニー群で、最初期のサイドのひとつ。一週間戦争で公国軍の猛攻を受け、甚大な被害を出した。その際、8バンチ<アイランド・イフィシユ>はGGカスで住民を避難させたうえ、ブリティシユ作戦で地球に落下し、破片が豪州や北米などに落着いている。



サイド5 (ルウム)

L1に建設された、当時唯一のサイド。U.C.0050の時点で20億の人口を抱える大規模コロニー群だったが、ルウム戦役で徹底的に破壊され暗礁宙域となった。ルウム戦役でコロニー落としに利用されかけた11バンチ<フホート>、観光コロニーの<デキサス>などがある。



GUNPLA Generation

ガンプラ ジェネレーション

文 あさのまさりこ

vol.23

MA-05 ビグロ

思い返せば、ガンプラで最初に製品化されたMAはビグロであった。MSと比べるとMAはさすがに商品展開が乏しいため、今回は「ビグロ+α」という変則的なスタイルにして、小ネタを拾っていく。

【特別企画】ジオ軍宇宙艦隊艦艇ムサイ

ビグロやそれと近い形態のMAのガンプラだけではページが埋まらぬため、ここでは特別企画としてジオ軍の宇宙艦隊艦艇ムサイについて触れてみたい。最初に発売されたガンプラは1/144 ガンダム、次いで1/100 ガンダム（共に1980年7月発売）というお約束の展開であったが、じつは3番目に発売されたのは1/1200 量産型ムサイ（1980年発売 価格324円）なのだ。これは当時バンダイ模型が商品展開していた「宇宙戦艦ヤマト」シリーズが大いに売れていたため、「MSだけでなく、やはり主力戦艦艦艇を早めに製品化しておくべきなのでは？」という手探り状態のマーケティングリサーチに基づく結果であった（ちなみにやはりMSのほうがニーズが高く、シャア専用ムサイの発売は1981年2月まで引き延ばれることに）。

そこから実に24年後、まさかの製品化となったのが1/1700 EXモデルムサイ（2004年12月発売 価格3,024円）。これは先述の3DCGアニメ「機動戦士ガンダム MS IGLOO」に合わせた内容となっており、超悪名ディテールが完全再現されている。

1/1200 量産型ムサイは、ヤマトシリーズで培ったノウハウが駆使されているため非常に完成度が高かった。



「高価商品なので製品内容に妥協はしない」というEXモデルシリーズ製品だけに、EXモデルムサイは究極の逸品。

「ビグロそのもの」はもちろんだが、コンセプトの似たMAもあわせて紹介！

劇

中でどれだけ活躍しても、人型ではないその特異な形状ゆえに感情移入がしづらい——言ってしまうとMAとはそういう存在である。とくにガンプラの場合は「見て楽しむ」のではなく「投資して楽しむ」ものである以上、MAのキット化数が少ないのはある意味自然な成り行きだろう。

そうした状況下において、「機動戦士ガンダム」シリーズ初のMAの製品化となったのが1/550 ビグロであった（1981年9月発売／価



宇宙戦艦として、SF感溢れるデザインが魅力であるビグロ。できれば新作キットが見てみたいのだが……。

格324円）。アームの各関節が可動し、クロートメカ給子機構は開閉選択式のパーツが付属。ディスプレイスタンドには、パイロットであるトクワン大尉のパーソナルマークが書かれているのも特筆演出であった。

「そのビグロの機体コンセプトを元に開発された」という設定を持つのが、水中用MAの1/550 グラブロである（1981年10月発売／価格324円）。クロールはビグロと同様に開閉選択式のパーツが付属し、アームは基部にロール軸が設けられており、巡航形態からアームを機体前方に展開させることが可能だ。そもそも

確かに水中用であるものの、ビグロとの統一コンセプトにより設計されたのがよく分かるグラブロのシルエット。



フォルムの把握がしやすいデザインだけに、ビグロと同様にプロポーションは「極めて良好」と言うことができるだろう。

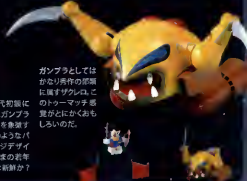
そして最後に紹介するのは、番組初オンエア時から各方面にて、ある意味で話題視されていた1/250 & 1/550 ザクレロ（1982年8月発売／価格540円）。「ビグロやグラブロに先駆けて開発されたものの制式採用には至らず、無断出撃にはガンダムに破壊された」という設定制作は族群に上手かった反面、モノアイとはかけ離れた昆虫的な複眼、野獣そのものの牙付きの大口……と、そのデザインはガンダムワールドにおいても異端中の異端。しかしそんなザクレロまでもが平然と製品化されたのが、80年代初盤におけるガンダブームの熱気とも言えたのである。

ちなみになぜMAの共通スタイルである1/550だけでなく1/250との2体セットとなったのがと言うと、ザクレロの機体設定が他のMAに対して小さすぎたため。キットにはGファッターの8パーツを装着した1/550 ガンダムが付属しており、劇中シーンを再現するためのディスプレイスタンドも付属する。

なお、これらのビグロ、グラブロ、ザクレロがリニューアル化される可能性は極めて低いが、だからこそ80年代初頭におけるガンプラの味わいを噛み締めてほしい。



80年代初頭におけるガンダブームを象徴するかのようなパッケージデザイン。いまの若年層には新鮮か？



ガンプラとしてはかなり秀作の部類に属すザクレロ。このトーマッチ感覚がとにかくおもしろいのだ。

NEXT MS

次号予告

ISSUE
24

お知らせ

諸様の事情により、ガンダム・モビルスーツ・バイブルは、しばらくの間、隔週刊での発売にさせていただきます。
次号、第24号の発売は8月20日(火)です。

ガンダムF91

MSの小型化を推進するサナリイが開発した、
F(フォーミュラ)シリーズの最新鋭機。
U.C.0123におけるMSの限界性能を達成した。

お問い合わせ先(お問い合わせ先) 発行元(発行元) 発行元(発行元)

発行元(発行元) 発行元(発行元) 発行元(発行元)

発行元(発行元) 発行元(発行元) 発行元(発行元)

発行元(発行元) 発行元(発行元) 発行元(発行元)

関連レポート

無人マシンの襲来

MS機体解説

機体解説 / 武装解説

関連MSラインナップ

F91と関連機体

MSパイロット
シーブックと周辺人物

MS戦記
F91 戦艦の記録

MS進化論
F91 開発系譜図

メカニック・ジャーナル
試作機と主力量産機
フォーミュラ計画

ガンブラ ジェネレーション
第二期MSの特徴を捉えた
機体に注目!

第24号

8月20日(火)発売

定価: 本体639円 + 税

※税別価格に消費税が加算されます。

※マガジンの内容が変更となる場合があります。

サナリイの革新的技術を盛り込み、新たな潮流を築いた小型MS

ガンダムMSバイブル
専用マガジンケース
好評発売中!!

キャンペーン
期間特別価格

699円

(1冊 8%込)

特価期間: 2019年9月末まで

定期購読とあわせてのご注文で送料無料!

※マガジンケース1冊に本誌約10冊分を収納できます。
※何冊でもご購入いただけます。※発行日は変更になる可能性があります。

整理に便利な
ステッカー付き!

01 02
03 04
05 06
07 08
09 10

好評
発売中

バック
ナンバー
ご案内



18 Vガンダム



19 ギルグム



20 ユニコンガンダム
2号機 パンシィ



21 キャプラン



22 リ・ガズィ

※第1号～第17号も好評発売中。全国の書店でお買い求めください。

豊富なビジュアルと資料によって、毎号1機のMSを多角的に解説！

GUNDAM

MS Bible

Mobile
Suit

THE OFFICIAL

ガンダム・モビルスーツ・バイブル

MA-05 / ビグロ

23

2019.8.20 / 8.27 合併号



ビグロ
BIGRO

MA-05

Total Height : 23.6m
Weight : 125.5t
Total Weight : 229.8t
Material : Super Hard Alloy Steel
Generator Output : 17,800kW
Thrusters Total Propulsion : 136,100kg



「地球連邦軍の白いMS」を翻弄した、宇宙用高機動MA

